

## P-0810-5 独居高齢者における互酬性とソーシャル・サポートの健康への影響

長谷部 雅美<sup>1)</sup>、小池 高史<sup>1,2)</sup>、深谷 太郎<sup>1)</sup>、野中 久美子<sup>1)</sup>、小林 江里香<sup>1)</sup>、西 真理子<sup>1)</sup>、村山 陽<sup>1)</sup>、鈴木 宏幸<sup>1)</sup>、藤原 佳典<sup>1)</sup>

東京都健康長寿医療センター研究所<sup>1)</sup>、日本大学文理学部<sup>2)</sup>

【目的】独居高齢者の健康や安心な生活を支援する上で、ソーシャル・キャピタル（SC）の醸成は重要である。認知的 SC の指標である信頼や互酬性は、心身の健康に肯定的な影響を及ぼすことが指摘されているが、他の変数との関連を踏まえた検討は少ない。そこで本研究は、互酬性とソーシャル・サポート（サポート）に着目し相互の関連を検討すると共に、互酬性とサポートの健康への影響について検討することを目的とする。

【方法】2011年9月に東京都大田区A地区の住民基本台帳上の独居高齢者2,569名を対象に、質問紙調査を実施した。分析では実質独居の1092名を対象とした。互酬性の項目は、「一般的互酬性：多くの場合、人は他人の役に立とうとする」と「地域の互酬性：近隣の人（以下同文）」から構成し、「そう思う」から「そう思わない」までの4段階で測定した。サポートは、手段的サポートと情緒的サポートの提供者（家族・親戚/友人・隣人）の有無を尋ねた。健康は、主観的健康感などを用いた。分析では、互酬性を高群・低群に、サポートを「両方いる」「家族のみ」「友人のみ」「両方いない」に分類した。

【結果】第1に、 $\chi^2$ 検定を用いて互酬性とサポートの関連を検討した結果、「一般的互酬性×サポート（両方）」「地域の互酬性×手段的サポート」において、高群で「両方いる」割合が高く「両方いない」割合が少なかった。一方、低群ではまったく逆の結果であった。「地域の互酬性×情緒的サポート」では、これらの結果に加えて「家族のみ」の割合が高群で低く、低群で高いという結果だった。第2に、互酬性（2水準）とサポート（4水準）を独立変数、主観的健康感を従属変数とした、二元配置の分散分析を行った結果、各要因の主効果のみが認められた。しかし、家族からの手段的サポート（2水準）と一般的互酬性（2水準）を要因とした場合は、主観的健康感に対して交互作用が確認され、高群ではサポートを得ていると主観的健康感の得点が高くなっていた。

【結論】第1に、互酬性の高さはサポート提供者の多様さに関連していることが示唆された。また、地域の互酬性が低い人は、高い人に比べて情緒面で家族からサポートを受領しやすいことが示唆された。第2に、一般的互酬性が高い人は、低い人とは異なり、手段的サポートを受領することで主観的健康感が良好になる可能性が示唆された。



